



1日だけの手づくりレストラン大繁盛

女山大根まつり

地域の特産物“女山大根”を味わう『第3回女山大根まつり』が2月8日、西多久公民館で行われました。(主催 西多久町を考える会)回を重ねる毎に評判が高まり、県内外から先着100人が参加。地元のふるさと情報館「幡船の里」や郷土料理研究会のメンバーが調理した大根サラダ、切干し大根煮、白和え、天ぷら、ゼリー、ばら寿司など全てに女山大根を使ったメニュー16品の味を堪能しました。デザートには、「乙女のころ」と命名の「女山大根アイス」も出され、ここだけでしか味わえない貴重なおいしさに大満足の様子でした。女山大根は、ずんぐり型(カブ型)で首部分が赤紫色。酢を使って調理するとその皮の色で桜色になり、煮込んでも煮崩れしないのが特長。ポリフェノール含有が多いことが分かっています。当日は、品評会・即売会も併せて行われ、「家でもぜひ調理したい」と、ずっしりと重たい女山大根を買い求める人で賑わいました。

▲「おいしい」と、女山大根メニューの品々を堪能する参加者

腕の疲れる大変な作業でした

東部小6年生の地域美化活動

東部小学校の6年生児童たちが、2月12日に東多駅周辺の美化活動を行いました。地域のありがとう活動として毎年取り組んでいますが、今回は駅の「東多久交流プラザ」の落書き消しも試みました。プラザ内には地域の方々の写真等の作品が掲示されていますが、よく見ると破いたり、木製の壁にはマジックや彫られたりした落書きがあちこちに。児童たちは壁を紙やすりで根気よく磨いた後、丁寧にニス塗りを塗って修復しました。

落書き消しを提案した星川詩織さんと岸川公美さんは、「前に落書きがあるのを見かけたので思い立ったのですが、今日あらためて見てみると予想以上にひどくて、すごく悲しい」と残念そうに語りました。文字などから、落書きは小学生よりも分別がつかずの方がやったものと推察できます。子どもたちが悲しんで後始末をしたことを心にとめてください。



▲二度と荒らされないように願いを込めて、削りくずまみれになりながら、1時間半かけて落書きを消しました

は「貫性が大事」と。佐賀新聞社で昨年の年次企画・さが子ども白書を担当した中島義彦さんは「完全週五日制の影響で学校現場が忙しくなりすぎている。だからこそ家庭と地域の連携がキーワードだが、リード役は学校。いろんな意味で学校が家庭、地域に働きかけるケースがうまくいっている」と取材を通して感じた」と提示。

続く、家庭教育の課題や欠かせないことの議題に対し、西溪中育友会会長の諸江啓二さんは「私たちが親や先祖、ふるさとを大事にすると、子どもも引き継ぐ心が育ち、親だけでなく、祖父母や地域の力にも育てられている。また、行事やイベントに参加に子どもの意向でなく、親が後押しする強制も必要。実になるものがある」と。社会教育委員長の野田勝人さんは「他人の子どもはもちろん、自分の子どもにも怒れない大人を見て、おかし世の中。心を込めたしかり方で、子ども人間形成にみんなで手を添えてほしい」と提起。

5人はそれぞれの立場で、子育てのノウハウや地域との関わり方、学校現場の現状と、家庭・地域・学校単位で昨行われた「くらしのアンケート」で問題点を探ったり、質問にも返答。会場から、県のPTA連合会母親委員会で作られた子育て一番応援メッセージ「①あいさつ習慣日々努力②家庭の絆は日々食育③親子でがまん日々前進④ことは、しぐさで日々反省⑤子育て楽しみ日々発見」も紹介されました。

このシンポジウムで、それぞれが子どもの健全な成長のためには、家庭で親が責任ある行動を示すことの大切さと地域や学校などでの様々な体験活動に親子で積極的に参加していくことの必要性を再確認しました。

